

国立国語研究所学術情報リポジトリ

まみ（獺・獾）考

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-07-25 キーワード (Ja): マミ, マミアナ, アナグマ, 地名 キーワード (En): mami, mamiana, badger, toponyms 作成者: ローレンス, ウェイン メールアドレス: 所属: オークランド大学 名誉研究員 |
| URL | https://doi.org/10.15084/0002000514 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



まみ (猫・獺) 考

ローレンス・ウエイン

オークランド大学 名誉研究員

要旨

本稿ではある種の小動物を表すマミという俚言の地理的分布とアクセント範疇を究明する。このマミという俚言は本州東部のほぼ全域と、西日本では中国地方の西部に分布している。だが、北海道を除いた日本全土にあるマミアナという地名、あるいは狸・猫の字をマミと読ませる地名をほぼ網羅的に収集・列挙した結果、その分布からマミという俚言はかつて四国のやや広域でも使われていたことが読みとれる。これを裏付けるかのように、高知県の山岳地域では二十世紀中葉まで俚言としてマミがまだ使われていたという話者の回想がある。マミは方言によってそのアクセント型が異なるが、その分布からマミは金田一語類の1類に属するとみられる*。

キーワード：マミ，マミアナ，アナグマ，地名

1. はじめに

本稿では、狸・アナグマ・ハクビシン等のある種の小動物を表すマミという俚言の地理的分布を解明し、そのアクセント類の推定を行う。マミの意味は考察の対象としない。その理由はこれらの小動物は主に夜行性のためか、近くで見たことがある人は少ないからであり、そのためにこれらの名称が指す動物の同定は困難である（柳田 1948 参照）からである。例えば同じ伊豆半島でも、松崎町小杉原ではマミはアナグマ（イタチ科）を指すと言う話者がいる一方、西伊豆町大沢里^{おおそうり}ではハクビシン（ジャコウネコ科）、宇久須^{うぐす}月原ではタヌキ（イヌ科）でもアナグマでもない肉食の小動物（畑を荒らさない）、仁科禰宜ノ畑^{ねぎ はた}では畑を荒らす（さつま芋を食する）小動物を指すという言質をとっている¹。

* 本稿は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」（プロジェクトリーダー：木部暢子）の成果であって、2019年11月28日–29日にオークランド大学で開催された7th Japanese Linguistics Symposium 2019で発表したものをその後の調査に基づいて増補したものである。本研究をなすにあたってマミのアクセントと意味を教えて下さった日本各地の多くの方々にお世話になり、記して心より感謝申し上げる。また、貴重な情報と方言形の録音を下さった秋吉台科学博物館学芸員の石田麻里氏と浜松市水窪支所の鎌倉雅之氏のご両人に拝謝する。最後に、多くの有益なコメントを下さった査読者の方にも謝意を申し上げます。

¹ 2023年3月28日に臨地調査の際に得られた情報。情報提供者は鈴木隆氏（昭和22年生まれ、小杉原）、斉藤悟氏（昭和23年生まれ、大沢里）、森田喜久雄氏（昭和14年生まれ、月原）、土屋正雄氏（昭和17年生まれ、禰宜ノ畑）である。

2. まみの時空分布

各地の語彙集などからマミの分布領域は本州東部の青森県から長野県までと、本州西部の島根・広島・山口の三県で、以下にその典型的な例をいくつか示す。

青森県むつ市田名部 ^{まみ}mami 「アナグマ」(川畠(編) 2002: 81)

秋田県北秋田市阿仁根子地区 ^{まみ}mami 「アナグマ」(秋田県教育委員会(編) 2008: 38, 65)

山形県真室川町^{のぞき}及位 ^{まみ}mami 「アナグマ」(高橋 2021: 622)

新潟県新潟市西蒲区間瀬 ^{mamimuzi}mamimuzi 「アナグマ」(柳田 1948: 4, 8)

千葉県袖ヶ浦市野里 ^{maami}maami 「笹熊」(平山他(編) 1993: 3010)

神奈川県相模原市緑区川尻地区 ^{まみ}mami 「タヌキ」(安西 1963)

長野県遠山 ^{まみ}mami 「タヌキ」(遠山(編) 2004: 362)

島根県出雲市 ^{まみ}mami 「アナグマ」(広戸・矢富(編) 1963: 647)

広島県庄原市 ^{まみ}mami 「アナグマ」(村岡 1981: 66)

山口県萩市旧福栄村^{そん} ^{まみ}mami 「アナグマ」(波多 1967: 65)

美祿郡美東町^{みとうちよう} ^{まみ}mami 「アナグマ」(蔵本 2004: 463)

1474 年頃の版の国立国会図書館蔵『雑字類書』にある真猪^{マミ}(285 オ)は文献にみる早い方の例である。東京には麻布狸穴町^{まみあな}という所があって、この地名について菊岡(1732: 16 ウ)に次の記述がある。

○^{まみあな}雌狸穴 長坂のひかしへこれも坂なれともた、まみ穴と斗云ひて坂とはいはず
むかし此坂に^{まみ}雌狸の住し大きな穴ありとそ

この地名に関して別の語源説がある。荻生(1762)には「まみ穴といふ所は古金ほりたる穴なり、まみはまぶの事なり。享保六年の比黄金のやうなる砂いでたれどもいまだ年のたれぬ金なりとてほらずなりぬ。」とある。これについて篠崎・小林・岩井(註)(江戸中期)は「金山ノ金ホル穴ヲマブト云フ」に対して「章按、金山ノ上ニ穴ヲ開テ、光ヲトルヲマブト云」と解説を付けている。本考察ではまみ穴のマミがマブと同系語であるとするこの説を採択しない。マブにはマンブやマンボ(一)の変異形がある(尚学図書(編) 1989: 2279)が、マブとマミの中間的な形式としてあってもよい*マビあるいは*マムはどこにも存在しないからである。また、まみ穴に似た地名は秋田県から山口県まで広範囲に分布するが²、この四十ほどある地名の多くは鉾山と関

² 本州にある「まみあな」の地名、あるいは狸・猫の字をマミと読ませている地名は他に秋田県横手市雄物川町今宿猫袋、岩手県花巻市豊沢町高狸山、同葛巻町江刈車門堀内沢明神穴(通称マミ穴)、新潟県長岡市小貫字マミ穴、宮城県白石市大鷹沢町狸穴、同刈田郡七ヶ宿町字猫、福島県田村市常葉町堀田字八百坂小字狸穴、同田村市常葉町小檜山字狸穴、同大沼郡会津美里町東尾岐字狸穴、同田村市常葉町小檜山狸穴、同伊達郡川俣町東福沢字マミ穴・字マミ穴山、同伊達郡川俣町飯坂字猫穴、同双葉町中田字マミ穴、同双葉郡浪江町棚塩字間見穴前、栃木県宇都宮市満美穴町、同宇都宮市篠井町字マミアナ、茨城県小美玉市倉敷字まみ穴台、同守谷市乙子字狸穴、同双葉町中田字マミ穴、同笠間市池野辺字マミ穴、同稲敷市伊佐津字狸穴、同茨城町上石崎字マミ穴、同つくばみらい市狸穴、同牛久市東猫穴町、千葉県銚子市三崎町マミ穴、同

係があるとは思えない。むしろ、マミという小動物の方言名の分布がまみ穴という地名の分布とほぼ重なり、そのマミが巢穴居住性の動物であることから考えて、地名のまみ穴のマミは動物名であると結論付けるのが妥当と思われる。

延応元年（1239 年）の関東下知状から現在の茨城町あたりに^{まみあなばやし}真美穴林村があったのが知られる（古典籍の会 2013: 65）ことから、マミなる語形は東日本では遅くとも 13 世紀まで遡るといえよう。

上記のマミの例はすべて本州のものであるが、九州筑前国の用例として竹田・小野（編）（1738: 51 オ）にある「まみ」が挙げられる。「たぬき」も別に記載されていることから「まみ」はアナグマであろうと考えられる。

四国ではマミという動物名称は現存しないようであるが、高知県にはマミ穴あるいはその意味の地名に次のものがある—土佐町西石原小字マミ穴、土佐町地藏寺小字上^{うえ}マミ穴・下^{した}マミ穴・西マミ穴、仁淀町森山小字マミアナ、^{ゆすはら}禰原町豊原字^{まみ}狸穴、佐川町加茂小字マミ穴、大豊町角茂谷字^{まみ}狸穴、いの町小野小字マミアナ、香美市土佐山田町大^{おおこうにゅう}後入小字マミアナ、香美市香北町根須字^{まみ}狸穴、香南市香我美町撫川字マミアナ、幡多郡黒潮町御坊畑字マミガウロ、黒潮町上田の口字マミウロ。このうち、土佐町地藏寺では昭和 18 年生まれの方³から子供のころにアナグマ（？）のことをマミと言っていたというご教示を受けた。このことから高知県ではマミという俚言は 20 世紀前半まで使われていたことが察せられる。

徳島県に美馬市^{こやだいら}木屋平字三ツ木小字まみ穴と三好市井川町井内西小字間見穴があるほかに勝浦郡勝浦町棚野字^{おくたずかわ}奥立川に「狸」の字をマミと読ませる^{まみだに}狸谷という小字がある。この勝浦町では狸は tanoki といい、仔狸は mamida ～ mameda と言う⁴。

マミダはマミダヌキの略である。マミダヌキとは室町末期の版とされる『伊京集』の「真見猯マミタヌキ」（37 ウ）⁵や尾州のマミタヌキ「アナグマ」（内藤（編）1789: 17 ウ -18 オ）に見られ、この例はアナグマを指す（現代の愛知県東加茂郡と島根県益田市匹見上地区のマミダヌキもあり（尚学図書（編）1989: 2283, 広戸・矢富（編）1963: 647））。だが、語頭構成素のマミ = の意味に対する意識が薄れていったために、一方ではマミダヌキが狸を表す（例えば徳島県那賀郡のマミダノキ（尚学図書（編）1989: 2282））ようになり、また一方ではマミ = が接頭辞のマメ = と

八千代市島田台字間見穴、同印西市大森字^{まみあな}狸穴、同印西市和泉字まみ穴、同柏市手賀字^{まみあな}狸穴、同匠瑳市内山字まみ穴、群馬県渋川市赤城町榎（利根川中流の釣り場として知られるまみ穴（通称））、静岡県賀茂郡東伊豆町奈良本字マミ穴、同島田市川根町葛籠字マミアナ、同浜松市浜名区^{おいだいら}大平字マミアナ、山梨県南都留郡富士河口湖町勝山字^{まみあな}西編穴上尾根、同身延町大塩字まみ穴、長野県伊那市手良沢岡^{まみだい}狸台、同伊那郡箕輪町福与小字まみ穴、山口県下関市豊田町全路字^{もくろうじ}まみ穴が挙げられる。また、山口県の秋吉台にある^{ためきあな}狸穴と現在呼ばれている洞窟は小澤（1925: 35）の記述から以前はマミ穴と呼ばれていたことが分かる。

³ 地藏寺在住の西村卓士氏（2024 年 8 月 24 日にご教示）。マミの後はノイ（高低音調）が使われる時期があったが、今はアナグマと言うという話であった。なお、ノイは方言辞典などには見当たらないが、「野猪」ではないだろうか。

⁴ 石田義夫氏からの私信（2019 年 4 月 10 日）。

⁵ 「猯」は豸 + 青と書かれており、「猪」の誤記ではないかと思われる。

して再解釈され、アナグマの意味を保った山口県山口市小鯖地区と島根県鹿足郡吉賀町六日市のマメダヌキ（坂倉 1961: 12; 広戸・矢富（編）1963: 648）の例もあるが、多くは仔狸か小さい狸という意味に移行している。マミダヌキ・マメダヌキは後にマミダ・マメダに下略されたといえる。

3. まみのアクセント

青森県の下北方言群の田名部方言（ローレンス 2020: 45）、上北方言群の七戸方言（工藤 2008: 1995–96）、さらに深持方言（石田（監）2016: 263）のマミはともに無アクセントの音調である。岩手県一関市の東山町田川津、千厩町奥玉および石清水、室根町釘子、それに宮城県の気仙沼市磯沢と美里町南郷のマミも無アクセントである⁶。島根県出雲市方言のこの語形も無アクセント（広戸・矢富（編）1963: 647）である。外輪式アクセントである青森・岩手県南部・宮城県北部、そして飯南町を除いた出雲地方の諸方言の二拍名詞のアクセントは1・2 / 3 / 4・5（「/」は区別があるの意で、「・」は類の統合を表す）のような金田一語類（金田一 1974: 61–73）の統合パターンを示しており、この無アクセント型（平板型音調）は1・2類に相当する。

島根県飯南町井戸谷⁷および山口県萩市福江⁸と美祢市秋芳町⁹も同様に無アクセントである。伊豆半島では西伊豆町の宇久須字月原、仁科禰宜ノ畑、大沢里、そして松崎町の小杉原のマミも無アクセントである。東京方言と同じ中輪式アクセントである山口県と静岡県の方言は1 / 2・3 / 4・5のようなアクセント語類の統合パターンを示し、無アクセントの二拍名詞は1類相当である。同じ中輪式アクセントである長野県飯田市高山のマミも無アクセントであるが¹⁰、同県の上田市西部の旧塩田町ではマミ～マメ「アナグマ、タヌキ」は語頭アクセントで¹¹、下諏訪町上久保でも収獲直前のトウモロコシを荒らすという害獣のマミーは親世代の発音では語頭アクセントであったという報告がある¹²。諏訪地方（岡谷市・諏訪市・茅野市・下諏訪町・富士見町・原村）全般が語頭アクセントであるという¹³。静岡県藤枝市岡部町のマミ「アナグマ」も語頭アクセントであるという（佐藤 1967: 414）。

同じ中輪式アクセントである広島県庄原市では高野町新市、比和町比和、春田町峰田、そし

⁶ 2023年3月31日に臨地調査の際に得られた情報。情報提供者は田川津（昭和24年生まれ的女性）、石清水（昭和23年生まれ的女性）、釘子（昭和28年生まれ的女性）、南郷（昭和18年生まれの男性）である。

⁷ 2023年3月22日に臨地調査の際に得られた情報。

⁸ 2023年3月21日に臨地調査の際に佐伯功氏（調査時で69歳）から得られた情報。

⁹ 美祢市立秋吉台科学博物館の石田麻里学芸員が送って下さった2024年9月に80歳代の男性がするマミの話の録音による。

¹⁰ 2024年3月12日に臨地調査の際に木沢地区の昭和29年生まれの男性から得られた情報。

¹¹ 出野憲司氏からの私信（2024年3月16日）。

¹² 神山裕子氏（昭和39年生まれ）からの情報（2019年9月30日と2024年3月11日）。

¹³ 出野憲司氏からの私信（2024年4月24日）。

て同三次市吉舎町^{きさちやう}上安田のマミは語末アクセントで¹⁴、これは2・3類相当のアクセント型である。静岡県浜松市天竜区水窪奥領家^{みさくぼ}のマミも語末アクセント（3類相当）であるという¹⁵。

遠く離れた島根県と青森県のマミが無アクセント（1・2類相当）であり、同じく遠く離れた山口県と静岡県西伊豆町のマミも無アクセント（1類相当）であることから、マミは元来1類（高起式無アクセント）名詞であったと推定できよう。高知県土佐町地藏寺のマミも1類相当の高平音調である¹⁶。広島県と静岡県水窪のマミが語末アクセントであるというのは、独立に起こった単発的な変化の結果であろう。長野県の上田市旧塩田町と諏訪地方や静岡県岡部の語頭アクセント（4・5類相当）は東京式アクセントの方言では日常あまり用いられない二拍名詞が語頭アクセントになる傾向（秋永 1985: 71-72）と動物名が語頭アクセントになる類推変化をうける傾向（上野 2002: 178）のためであろう。

4. み

平安期以前の資料にマミはなく、アナグマを指していたのは「み」という一音節語であった。早い例として『新撰字鏡』（898-901年）の「貉 弥又牟志奈」（群書類従 巻 497 下 19 オ）、『本草和名』（918年頃）の「猫膏 一名獾狨和名美」（寛政 8年（1796）版 下巻 7 オ）、1200年頃の成立と言われる『類聚名義抄』の「猫 ミ」（佛下本 128）が挙げられる。時代を下ると15世紀中葉の早稲田大学蔵『尺素往来』の「猫」（7ウ）¹⁷や1713-1716年刊の『和漢三才図絵』の「猫」（巻 38: 1ウ, 24オ；巻 40: 20オ）¹⁸がある。

この「み」が「たぬき」に複合語化した形式は1474年頃の版の国立国会図書館蔵『雑字類書』の「猫」（450ウ）や寛永20年（1643）刊の『料理物語』の「みゝぬき」（20ウ）であり、ともにアナグマを指すと考えられている。

意味の観点からマミはこの古いミに接頭辞の「真=」が付いた語形であると考えられる。他に真=+一拍語の複合語として横・真木、真麻、真麻がある。真麻のアクセントは未詳であるが、横・真木がどのアクセント類に属するかは見当がつく。中央式アクセントの京都市と高知市の方言と伊吹島式アクセントの伊吹島方言では「横」は高起式無アクセント（高平音調）の1類相当である（中井（編）2001: 47, 1997: 20, 上野 1985: 135）。『類聚名義抄』も1類相当の高高（佛下本 111「椀」）である。また、中輪式アクセントの島根県益田市方言の「真木」も高平（広戸・矢富（編）1963: 640）で、これも1類相当であることから、「横・真木」はマミと同じ1類に属

¹⁴ 2019年10月31日と11月1日に臨地調査の際に得られた情報。情報提供者は峰田（昭和22年生まれ、須澤軍治氏）、新市（昭和26年生まれの男性）、比和（昭和13年生まれの女性）、吉舎町（昭和17年生まれの男性）である。

¹⁵ 浜松市水窪支所の鎌倉雅之氏からの私信（2024年8月14日）による。話者は昭和32年生まれの現役の猟師。

¹⁶ 西村卓士氏（昭和18年生まれ）からの教示（2024年8月24日）。地名のマミアナも高平音調である。

¹⁷ 1668年の京都石田治兵衛刊の『尺素往来』（17ウ）に猫とある。

¹⁸ 東洋文庫版では巻40の躡（けものたなごころ）の項に猫とある（島田・竹島・樋口（訳注）1987: 164）。

する名詞であるといえる¹⁹。この事実はマミが真 = + ミに由来する説の多少の裏付けになろう。

5. おわりに

以上では本州東部に広範囲に、そして西部では中国地方の一部で使われるマミという俚言の地理的分布とアクセント範疇を調査した結果をまとめた。マミアナを含む、あるいは狸の字をマミと読ませる地名の分布から、マミは動物名を表す俚言としては現在はいいられていないが、地名の分布から、かつては中国のやや広域でも用いられていたことが推測でき、高知県土佐町西部の山岳地域では二十世紀中葉まで俚言としてマミはまだ使われていたことを報告した。同地域にマミ穴を含む小字名が複数あるのはこの単語の残存に寄与したと考えられる。

マミは方言によってそのアクセント型が異なるが、青森・岩手・宮城県北部および伊豆半島と山口県と島根県出雲市、そして高知県の諸方言のマミが1類相当の音調になっていることから、マミという語ができた時期は1類所属であったと結論できる。

参考文献

- 秋田県教育委員会（編）（2008）「『もの』から見た阿仁マタギ」『秋田県指定有形民俗文化財阿仁マタギ用具文化財収録作成調査報告書』（秋田県文化財調査報告書第441集）25-210。
- 秋永一枝（1985）「共通語のアクセント」NHK（編）『日本語 発音アクセント辞典 改訂新版』70-116。東京：日本放送出版協会。
- 秋永一枝（編）（2001）『新明解日本語アクセント辞典』東京：三省堂。
- 安西勝（1963）『稿本城山町俚言集』私家版。
- 石田善三郎（監）（2016）『七戸方言集（後編）』私家版。
- 上野善道（1985）「香川県伊吹島方言のアクセント」『日本学士院紀要』40(2): 75-179。
- 上野善道（2002）「アクセント記述の方法」佐藤武義・飛田良文（編）『現代日本語講座 3 発音』163-186。東京：明治書院。
- 荻生徂徠（1762）『南留別志』東都：須原屋茂兵衛。
- 小澤儀明（1925）「秋吉台の地史と地下水（一）」『地理学評論』1(1): 32-49_2。
- 川島柳三（編）（2002）『田名部辯語彙集』私家版。
- 菊岡沾涼（1732）『新撰 江戸砂子 五』日本橋南：若菜屋小兵衛。 http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/ru04/ru04_01761/ru04_01761_0005/ru04_01761_0005.pdf（2025年1月14日確認）
- 金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究—原理と方法』東京：塙書房。
- 工藤祐（2008）『青森県南部地方の方言・民俗（資料集）第3巻』私家版。
- 蔵本隆博（2004）「民俗」美東町史編さん委員会（編）『美東町史 資料編』445-473。美東町。
- 古典籍の会（2013）「早稲田大学図書館所蔵『諸家文書写』の紹介」『早稲田大学図書館紀要』60: 39-84。
- 坂倉道義（1961）『旧吉敷郡小鯖村方言』山口市：防長民俗叢書刊行会。
- 佐藤義人（1967）『駿河 岡部の方言と風物』東京：大学書林。
- 篠崎維章・小林茂右衛門・岩井金弥（註）（江戸中期）『可成三註 卷之二』。
- 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳（訳注）（1987）『和漢三才図会 6』（東洋文庫 466）東京：平凡社。
- 尚学図書（編）（1989）『日本方言大辞典 下巻』東京：小学館。
- 高橋良雄（2021）『及位の方言』東京：国立国語研究所。 <https://doi.org/10.15084/00003524>
- 竹田定之進・小野玄林（編）（1738）『筑前國産物帳 下』 https://adeac.jp/fukuoka-pref-lib/iiif/mp020030-100020/sanbutsucho_03/uv/52#c=0&m=0&s=0&cv=51&r=0&xywh=-752%2C0%2C4267%2C1842（2025年1月14日確認）

¹⁹ 東京語の横・真木は頭高アクセント（寺川・日下 1944: 896, 秋永（編）2001: 793）（4・5類相当）で、不規則的な対応を示している。

- 寺川喜四男・日下三好 (1944) 『標準日本語發音大辭典』 東京：大雅堂。
 遠山信一郎 (編) (2004) 『遠山のことば』 南信濃村：南信濃村教育委員会。
 内藤正参 (編) (1789) 『張州雜誌 卷百』。
 中井幸比古 (編) (1997) 『高知市方言アクセント小辞典』 (平成 9 年度文部省科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 09610542 研究成果報告書)。
 中井幸比古 (編) (2001) 『京都市方言アクセント小辞典』 (平成 9–12 年度文部省科学研究費補助金基盤研究 (C) 課題番号 09610542 研究成果報告書)。
 波多放彩 (1967) 『ふるさとのことば—山口県阿武郡福栄村方言』 萩：防長民俗研究所。
 平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫 (編) (1993) 『現代日本語方言大辞典 4』 東京：明治書院。
 広戸惇・矢富熊一郎 (編) (1963) 『島根県方言辞典』 松江：島根県方言学会。
 村岡浅夫 (1981) 『広島方言辞典』 広島市：南海堂。
 柳田國男 (1948) 「狸とムジナ」上毛民俗の会 (編) 『上毛の民俗』 1–9. 前橋：煥乎堂。
 ローレンス・ウエイン (2020) 「『田名部辯語彙集』記載語彙のアクセント資料」青井隼人・木部暢子 (編) 『日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成 青森県むつ方言調査報告書』 19–49. 東京：国立国語研究所。

On the Word *mami* ‘Badger’

Wayne LAWRENCE

Honorary Research Fellow, The University of Auckland

Abstract

This paper is an investigation into the distribution and accentual category of the dialect word *mami* ‘badger’ which is widely used in eastern Honshu and in parts of the Chugoku region of western Honshu. Place-name evidence points to it having been once rather widespread in Shikoku, and this paper reports evidence that the word *mami* was used until the mid-20th century in a mountainous region of Tosa-cho, Kochi Prefecture, probably sustained by the presence of multiple place names containing *mamiana* ‘badger sett’ in the area. Depending on the dialect, *mami* is initial-accented, final-accented, or unaccented, but the geographical distribution of these three accentual patterns leads to the conclusion that the word was originally a class-1 word (i.e. High-beginning unaccented) under Kindaichi’s classification.

Keywords: *mami*, *mamiana*, badger, toponyms